

保証委託契約の連帯保証人確約書



ジェイリース

保証会社：ジェイリース株式会社御中

事業用

承認通知書番号	JL-	※承認通知書左上記載の番号をご記入ください。			は06		
保証開始日	20	年	月	日	入居区分 どちらかご選択ください	単身入居	複数入居
契約プラン							
初回保証料	円		継続保証料	円/年		毎月保証料	円/月

賃借物	所在地	(〒 -)					
	名称						号室
	月額総賃料内訳	月額総賃料			駐車場		
		家賃			町(区)費		
		共益費			水道費		
管理費				()	()		
預入金内訳	預入金合計			保証金			
	敷金						
賃借人	現住所	(〒 -)					
	氏名	フリガナ					

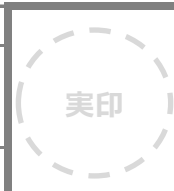
連帯保証人さまの保証限度額	契約時の月額総賃料 × 24ヶ月分
---------------	-------------------

私は、貴社と上記賃貸の賃借人との間で別紙保証委託契約書記載の内容で成立した保証委託契約（以下「原保証委託契約」という。）に基づき当該賃借人が貴社に対し負担する一切の債務（本件保証委託契約締結の前後を問わない）につき、別紙保証委託契約書記載の内容で当該賃借人と連帯して保証します。

- 私は、原保証委託契約第13条（財産状況の説明）の内容を賃借人から説明を受け、財産状況を理解し、確認の上本確約書を締結します。（事業プランもしくは法人契約に限る）
- 私と貴社との間の求償関係について下記の点を確認します。
 - 私は、賃借人と連帯して貴社に対して原保証委託契約に基づく賃借人の一切の債務を保証するものとします（私は、貴社に対し負担割合を主張できません）。
 - 私が、賃借人の負担する賃料等の債務を賃借人に代わり賃借人に弁済した場合でも、私はそれにつき貴社に求償することはできないものとします。
- 私は、貴社と上記賃貸の賃借人との間で成立した原保証委託契約書における私の保証限度額（極度額）は、次のA（極度額）記載のとおりであることに同意します。また保証債務の履行に関する次のBの内容に同意します。
 - （極度額）……保証極度額は、原保証委託契約締結時の月額総賃料の24ヶ月分とする。
 - 私から賃料等の支払があった場合、賃料等支払約定日までに遅滞なく支払をした場合は保証債務の履行とみなさない。
- 私は、別紙保証委託契約書の連帯保証人欄への署名、押印にかえて本確約書へ署名、押印します。また、私の本人確認書類として、印鑑証明書を1通添付します。

追加連帯保証人の | 20 年 月 日現在における賃借人の貴社に対する求償債務等(違約損害金、手続費
場合の説明 | 用を含む)は、金 円です。

連帯保証人	上記内容及び裏面条文を確認の上、直筆でご署名ください。押印は実印をご捺印ください。					
ご署名日	20	年	月	日		
現住所	フリガナ (〒 -)					
氏名	フリガナ					
生年月日	年	月	日	連絡先(電話番号)	-	-



保証委託契約(賃借人、ジェイリース間契約)
賃借人(以下「甲」という)と連帯保証人(以下「乙」という)が、甲と賃借人(家主・代理人を含む。以下「賃借人」という)との賃貸借契約(以下「原契約」という)に基づき、ジェイリース株式会社(以下「保証会社」という)と締結する保証委託契約(以下「本契約」という)は下記の通りとする。

第1条 本契約の申込及び締結の前提条件
本契約の申込及び締結については、保証会社と業務協定を締結している協定不動産会社(以下「協定業者」という)を介するものとする。

第2条 保証開始時期
保証は表面記載の保証開始日より開始するものとする。但し、保証開始日が到来しても、協定業者が保証料を受領し、かつ、保証会社が保証委託契約書を受領するまでには保証は開始しない。

第3条 保証限度額
(1)Jサポート(事業用)については、賃料・共益費・管理費・駐車場・水道料・光熱費・消費税・その他毎月賃料と共に支払われる費用(以下「月額総賃料」という)の4ヶ月分とする。
(2)Jウイング(事業用)については、月額総賃料の6ヶ月分とする。
(3)J-AKINAIについては、月額総賃料の2ヶ月分とする。
(4)本契約の保証期間において、賃料変更及び消費税率の変更等により月額総賃料が変更になった場合であっても、本条(1)から(3)で定める保証限度額は変更しない。

第4条 保証内容
保証会社は、原契約に基づき甲が賃借人に負担する金銭債務のうち、本契約の第3条保証限度額の範囲内において以下の範囲を保証する。但し、本契約の免責条項に該当する場合にはその責を免れるものとする。
(1)月額総賃料の滞納分。原契約が解除、その他の理由で終了した後、甲による賃貸物件の明渡し完了までの賃貸物件の使用に基づき月額総賃料1ヶ月分相当の賃料相当損害金。但し、表面に記載され、かつ、本契約所定の手続を経て、賃借人より保証会社に通知された滞納分に限る。
(2)退去時の修繕費・クリーニング・畳巻替・カギ交換費用・残置物撤去費用・ゴミ処理費用等(以下「退去費用」という)の合計が月額総賃料の最大2ヶ月分相当額。尚、J-AKINAIについては、前記の規程にかかわらず、退去費用の保証限度は月額総賃料の2ヶ月分相当額。但し、甲が支払義務のあることを認め、承諾したものに限るものとする。
(3)早期解約違約金は、J-AKINAIに限ることとし、1年未満の解約は月額総賃料の最大2ヶ月分相当額、2年未満の解約は月額総賃料の最大1ヶ月分相当額。但し、甲自ら退去する場合であっても、かつ、原契約の条項において、早期解約違約金の項目が明記され、甲が支払義務を認め、承諾し署名しているものに限る。
(4)甲の債務不履行による明け渡しまでに要した費用。原契約解除から表面記載の賃貸物件(以下「本物件」という)の明け渡しまでに要した通知・支払督促・訴訟その他法的な必要不費用(訴訟代理人費用を含む)として保証会社が認めため、賃借人が支出した費用。
(5)賃貸更新料並びに管理会社が徴収する事務手数料であることと甲において了解している更新事務手数料。但し、原契約の条項において、その項目が明記され、甲が支払義務を認め、承諾し署名しているもので保証会社が適法なものとも認めたものに限るものとし、法定更新時の更新料及び更新事務手数料についても同様とする。

(6)解約予告通知義務違反による違約金・損害金の合計につき月額総賃料の最大1ヶ月分相当額。尚、J-AKINAIについては、前記の規程にかかわらず、本項の保証限度額の2ヶ月分相当額。但し、甲自ら退去する場合であつて、かつ、原契約の条項において、解約予告通知義務及び違約金ないし損害金の項目が明記され、甲が支払義務を認め、承諾し署名しているものに限る。
(7)保証会社は、以下の①から⑧等、本条(1)から(6)を除く債務についてはその責を負わない。また、事業用借地(賃借)契約の場合、本条(2)から(6)の債務についてもその責を負わない。但し、保証会社が承諾した場合はこの限りではない。
①敷金・保証金・礼金その他名称の如何を問わず、甲が本物件入居に際して賃借人に支払う費用。同費用を賃借人との間で分割にて支払う合意がなされた場合の分割金も同じ。
②次条において定める保証開始日より1年経過することにより甲が支払わなければならない継続保証料を甲が支払期日を経過しても支払わないため、保証会社が甲に代わって賃借人に支払う月額総賃料の弁済を、保証会社において停止した場合。
③天災・地震・戦争・疫病等不可抗力により生じた損害。
④火災・ガス爆発・自殺等甲及びその関係者の故意・過失により生じた損害。
⑤甲が、本物件の瑕疵を理由に、月額総賃料又は退去費用(以下、月額総賃料と退去費用をまとめて「賃料等」という)の支払を履行せず訴訟等の紛争に至った場合において、その期間中の賃料等債務等。
⑥保証会社において、保証会社の求償権が得られないと判断した場合。
⑦賃料等の遅延損害金。
⑧甲が死亡した場合で、相続人が本契約を承継しない場合。

第5条 保証料
(1)甲は、保証会社に対し、本契約締結時、表面記載の初回保証料を支払わなければならない。
(2)Jウイング(事業用)及びJ-AKINAIについては、甲は、保証会社に対し、表面記載の初回保証料を本契約締結時に支払うとともに、表面記載の保証開始日より1年経過することによる表面記載の継続保証料を保証会社の指定した表面並びに期限内に支払わなければならない。
(3)本契約が保証期間満了前に終了した場合、又は保証期間内に表面記載の月額総賃料が減額された場合、又は解約された場合であっても、本条(1)(2)により支払った保証料は返還されない。

第6条 本契約の期間、更新及び解約
(1)保証開始日より、1年間とする。
(2)期間満了日までに賃借人の承諾を得て甲より保証会社に対して解約の申し出がない場合は、さらに1年間自動更新するものとし、その後も同様とする。
(3)甲が賃借人及び保証会社に賃料等の滞納かつ本物件を明け渡し、原契約が終了した場合は、退去日をもって本契約は終了する。
(4)賃借人と保証会社との間の保証契約が終了となった場合は、本契約は当然に終了する。但し、同終了時点において既に発生している求償権に関する権利義務(保証会社と乙との間の権利義務を含む)については、本契約に従う。
(5)甲が法人である場合で甲が解散したときは、本契約は当然に終了する。
(6)甲が本物件につき、原契約上の地位を第三者に移転した場合は、本契約は当然に終了する。
(7)原契約に基づく賃借権の譲渡・転貸等がなされた場合、又は本物件の占有者に追加並びに変更等があった場合は、本契約は当然に終了する。但し、事前に賃借人及び保証会社の承諾がある場合はこの限りではない。
(8)原契約の物件や甲・乙等の内容に変更があった場合は、変更日をもって本契約は当然に終了する。
(9)賃料の変更について賃借人から保証会社に3ヶ月以上通知しなかったときは、保証会社は本契約を解除することができる。
(10)甲が死亡した場合は本契約は、当然に終了する。但し、相続人が本契約を継承した場合はこの限りではない。

(11)甲は、電気・ガス・水道の利用状況、郵便物の状況等から2ヶ月以上甲が原契約の本物件に居住していないと保証会社において合理的に認められるにもかかわらず、保証会社から甲に対し連絡が取れないときは、本契約及び原契約にかかる保証会社と賃借人との保証契約は、保証会社が、賃借人に対し、本契約及び保証契約終了の通知を発生したときに、当然に終了することに同意する。

第7条 代位弁済及び求償権の行使
(1)甲が、賃料等の全部又は一部の支払を怠り、保証会社が賃借人より求められた場合、保証会社は甲に何ら通知なく、代位弁済できる。
(2)保証会社は、代位弁済によって甲に代位求償権の行使ができる。
(3)保証会社の代位弁済の実行は、賃借人より甲に対する債務不履行等を原因とする原契約の解除を妨げるものではない。
(4)本契約終了時に保証会社に求償権が残っている場合は、本条(2)の効力は存続する。
(5)賃借人と甲との間で、賃料等の支払いに関して争いがある場合は、保証会社は当該賃料の代位弁済を停止することができる。なお、保証会社は、支払いを停止した当該賃料の代位弁済債務につき、当該賃料の支払日期日から6ヶ月を経過すると、その支払いの責を免れるものとする。

第8条 事前求償
(1)甲に次の各号のいずれかに該当する事由が生じたときは、保証会社は、保証債務の履行前であっても、甲に対し事前に求償権を行使することができる。
①原契約又は、本契約の各条項に違反し、求償権の保全を必要とする相当の事由が生じた場合。
②所在不明と判断した場合。
③破産・民事再生・差押・会社更生等の債務整理手続きを開始した場合。
④業上の廃止・解散の決議及びみなし解散が生じ、又は、官公庁から業務停止その他業務継続不能の処分を受けた場合。
⑤前1)②③④各号のほか、保証会社が求償権の保全を必要とする相当の事由が生じた場合。
(2)保証会社が、前項により甲に対して求償権を行使する場合には、甲は、民法461条に基づく抗弁権を主張できない。但し、保証会社が事前求償権を行使する場合、甲は賃借人に弁済する事ができ、その弁済がなされた場合は、これに対応する事前求償権は消滅する。

第9条 甲の支払拒否
(1)甲は、原契約に基づく賃料等の支払を履行しないことにつき、正当な事由が存する場合には、賃料等支払約定日の前日までに、保証会社に対して、賃料等を支払わない旨及びその理由について書面により通知しなければならない。
(2)甲が、本条(1)の通知を正当な理由なく怠った場合で、保証会社が代位弁済を行ったときは、甲は保証会社の求償権の行使を拒むことはできない。

第10条 求償債務の履行
保証会社が代位弁済を行った場合には、甲は、直ちに保証会社が支払った代位弁済金及び代位弁済1回につき2,700円(消費税別)の代位弁済手続費用を保証会社に支払わなければならない。
第11条 支払の優先順位
(1)返済金の充当順位は、保証料・代位弁済手続費用・代位弁済金の順で充当する。但し、保証会社が別途判断した場合にはこの限りではない。
(2)甲は、保証会社による代位弁済が実行された場合は、完済に至るまで、保証会社に対する保証料・代位弁済手続費用・代位弁済金、賃借人に対する賃料の順で支払うものとする。但し、保証会社が別途判断した場合にはこの限りではない。
(3)甲は、保証会社に対する返済金の支払については、保証会社の指定する支払方法によって支払うものとする。但し、振込手数料等は甲の負担とする。

第12条 調査及び通知義務
(1)甲又は乙は、保証会社が有する債権の保全上必要とされる場合、甲又は乙の本籍地を記載する住民票・戸籍簿(抄)本との附票及び除票・除籍簿本等を取得ることに承諾し、それに関する全ての権限を保証会社に委任する。
(2)甲又は乙は、甲又は乙において第三者から債権の法務手続き又は、自ら申立てを行った場合は、直ちに保証会社と連絡しなければならない。
(3)甲又は乙は、不審り事故・支払不能又は死亡した場合は、直ちに保証会社に対して連絡しなければならない。
(4)甲又は乙は、原契約の内容に変更があった場合には、速やかに保証会社にその旨を書面にて通知しなければならない。
(5)甲は、甲の緊急連絡先に変更があった場合には、直ちに保証会社にその旨を書面に通知しなければならない。
(6)賃借人又は保証会社が、契約上必要な事務を甲に通知又は連絡する必要が生じた場合、連絡もしくは通知が不能又は著しく困難な場合は、甲の緊急連絡先に郵送・ファクス・伝言等による通知をすることで、通知に代えることができる。

第13条 財産状況の説明
表面記載の事業プラン、もしくは甲が法人の場合、甲及び乙は、次に掲げる事項について、甲は正しい内容を乙に説明し、乙はその説明を受けたことを相互に確認する。
(1)甲の財産及び収支の状況。
(2)原契約及び本契約から生じる債務以外に甲が負担している債務の有無、並びにその額及び履行状況。
(3)原契約及び本契約から生じる債務の担保として、他に他も提供し、又は提供しようとするものがあるときは、その旨及びその内容。

第14条 反社会的勢力の排除
保証会社は、甲又は乙が次のいずれかの項に反する場合に、何らの催告を要せず、本契約を解除することができる。また、これにより損害が生じた場合は、甲が賠償するものとする。
(1)甲及び乙(甲あるいは乙が法人の場合は、代表者・役員、又は実質的に経営を支配する者を含む)は、現在又は将来にわたって、次の各号の反社会的勢力のいずれにも該当しないこと。
①暴力団②暴力団員③暴力団員でなくなった時から5年を経過しない者④暴力団準構成員⑤暴力団関係企業⑥総会屋等、社会運動等標ぼうゴロ又は特殊知能暴力集団等⑦その他前各号に準ずるもの
(2)甲及び乙は、現在又は将来にわたって、前項の反社会的勢力又は反社会的勢力と密接な交友関係にある者(以下「反社会的勢力等」という)と次の各号のいずれかに該当する関係を有しないこと。
①反社会的勢力等によって、その経営を支配される関係②反社会的勢力等が、その経営に実質的に関与している関係③反社会的勢力等に対して資金等を提供し、又は便宜を供与する等の関係④その他反社会的勢力等との社会的に非難されるべき関係

(3)甲及び乙は、保証会社に対して、自ら又は第三者を利用して次の各号のいずれの行為も行わないこと。
①暴力的な要求行為②法的な責任を超えた不当な要求行為③取引に関して脅迫的な言動をし、又は暴力を用いる行為④風説を流布し、偽計又は威力を用いて保証会社の信用を毀損し、又は保証会社の業務を妨害する行為⑤その他前各号に準ずる行為

第15条 賃借人から連帯保証人への委託
甲は、本契約において、乙に対し下記各事項の権限を委託し、乙はこれを受託するものとする。
(1)賃料等の支払を3ヶ月以上怠り、又は度々遅滞し、賃借人の催告によってもその支払をしないとき等甲に債務不履行が生じている場合において甲・賃借人間の原契約を解約する権限。
(2)賃料等の支払を3ヶ月以上怠り、又は度々遅滞し、賃借人の催告によってもその支払をしないとき等甲に債務不履行が生じている場合において賃借人から甲に対する原契約の解除を承諾する権限。
(3)前1)(2)各事項の事由が存在する場合における本物件明渡し・室内確認立会い・原状回復費用の価格決定の承諾等の権限。

第16条 本契約の解除及び本物件明渡し事項
甲が次の各項目いずれかに該当したときは、保証会社は、直ちに本契約を解除することができる。また、甲は本物件を明け渡すことを保証会社に約束する。
(1)原契約又は、本契約の各条項に違反し、保証会社から相当の期間を定めて催告されたにもかかわらず是正されないとき。但し、第17条1項に関らず、第5条2項に定める継続保証料を支払わなかった場合には、保証会社は、催告を要せず直ちに本契約を解除することができる。なお、前記の継続保証料及び毎月保証料を、賃借人が賃借人に代わって保証会社へ支払うことは妨げない。
(2)第14条に該当したとき。
(3)甲又はその関係者が本物件・共有部分、その他本物件の近隣において暴力団又は反社会的組織の威力を背景に乱暴的な言動をして、他の入居者・管理者・出入者等に迷惑・不安感・不快感を生じさせたとき。
(4)暴力団員、反社会的組織以外の者が甲である場合でも本物件内に暴力団構成員、同準構成員、反社会的組織員等を居住させ、又はこれらの者を反復継続して出入りさせたとき。
(5)期間の長短、賃貸物件の全部・一部を問わず、甲が、本物件を転貸したり、有償の宿泊契約(民泊契約)等を締結したり、これら契約締結のためのインターネットへの情報提供を含む広告宣伝等を行ったり、民泊業者としての届出・登録等を行った場合、保証会社は、何らの催告を要せず直ちに本契約を解除することができる。また保証会社は、甲が転貸したり民泊契約を締結している間、保証の責を負わない。
(6)甲は、保証会社による(5)の解除、免責について何らの異議も述べることはできない。(7)その他甲の信用状況が著しく悪化したとき。

第17条 債権譲渡
(1)甲は、本契約に基づき、保証会社が代位弁済した時は、甲が賃借人に負担する一切の債務の支払いに充てるため、甲が賃借人に預金した敷金・保証金その他の金員の返還請求権を保証会社に譲渡するものとする。
(2)甲は、前項に基づく債権譲渡について、賃借人に対して行う債権譲渡通知の権限を保証会社に付与するものとし、保証会社の承諾がない限り、この債権を減額・消滅させてはならない。
(3)甲又は乙は、本契約に基づく保証会社の債権が保証会社の指定する金融機関等に譲渡されても異議を申し立てることができない。
第18条 返還資金による弁済
保証会社が第17条1項の債権譲渡に基づき、甲から譲り受けた債権の弁済期が到来した場合は、本契約に基づく債務の弁済期到来の有無にかかわらず、甲に通知することなく、保証会社において賃借人から譲受債権に基づく返還資金等を直接受領し、本契約の債務の弁済に充当することができるものとする。

第19条 連帯保証人
(1)甲は、甲と連帯して、保証会社に対して本契約に基づく甲の一切の債務を保証するものとする(乙は、保証会社に対し、負担割合を主張できない)。なお、乙が死亡した場合、乙が保証する元本が確定し元本確定後の甲の求償債務についてはその責を負わない。
(2)乙が、甲の負担する賃料等の債務を甲に代わり賃借人に弁済した場合でも、乙はそれにつき保証会社に求償することはできないものとする。
(3)乙は本契約が更新された場合も本条と同責任を負う。また、原契約終了の事由にかかわらず、本契約と同一の賃借人、賃借人、賃貸物件についての賃貸借契約(以下「新賃貸借契約」)が、原契約終了後引き続き継続し、本契約について保証会社が賃借人に対して保証会社となる場合は、乙は新賃貸借契約の家賃保証委託契約の連帯保証人として甲が保証会社に対して負担する一切の債務を、甲と連帯して支払うを負う。
(4)甲は、保証会社が乙の信用状況が悪化したと判断した場合、保証会社の要求に応じて、乙に代わる、又は、乙と並ぶ連帯保証人付きなければならない。
(5)本契約に基づき乙が保証会社に対し保証する保証限度額は、本契約時の月額総賃料の2ヶ月分とする。
(6)乙から賃料等の支払があった場合、賃料等支払約定日までに遅滞なく支払した場合は保証債務の履行とみなさない。
第20条 連帯保証人に対する請求等が主たる債務の時効消滅に与える影響
保証会社の乙に対する支払請求等(催告・支払督促・訴訟提起・調停申立を含む)がこれに限らない。)、は、消滅時効の完成に関し、民法の規程にかかわらず、被請求者である乙の保証会社に対する債務のみならず、甲及び被支払請求者以外の本契約にかかる連帯保証人の保証会社に対する債務についても、時効の完成を猶予させ又は時効の進行を更新する効力をもつものとする。

第21条 明渡し後の残置物処分
(1)原契約が解除された後、甲が本物件の明渡しを完了し、又は甲が本物件の占有を放棄した後(本物件内に動産類がある場合には、保証会社はこれを所在の場所に保管し、保管開始後1ヶ月以上経過したときは、保証会社は甲に事前に通知することなくこれを処分又は譲渡するものとする。
(2)前項に関して発生する費用は甲の負担とする。
第22条 本契約に基づく個人情報の提供・登録・利用に関する同意
甲及び乙は、本契約に基づく個人情報の提供・登録・利用に関して、別紙の「個人情報及び法人情報の取扱に関する同意書」及び別紙の「個人情報及び法人情報の取扱事項」に同意する。
第23条 管轄裁判所の合意
本契約に関する訴訟における甲の法的手続きについては、保証会社の本社、又は支店の所在地を管轄する簡易裁判所及び地方裁判所を第1審の専属合意管轄裁判所とする。
第24条 規格外事項
本契約に定めのない事項については、関係法令及び慣習に従うものとし相互に信義を重んじ誠実に協議するものとする。